



1990年(平成二年)
5月号(No. 539)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

縦の会々員懐古……………麻生武治…(1)

海外の山……………(2)

「地平線から」
D・K・スコットのこと
板倉勝正……………(3)

東西南北……………(3)

「奥多摩・自然保護パトロール」
「私のヒマラヤメラ・ピーク」
「12年目の再会と出会い」
「シベリアの三角点」
「会員通信特集(4)」
「詩・2月の春」

自然保護随想……………麦倉 啓……………(7)

図書紹介……………(8)

「地上最強の登山家 山田昇」
「氷壁に刻む一山田昇・八木原
園明二人の登攀史」
「仲間と旅の思い出」

報告
「フィルムからビデオテープへ」
フィルム委員会……………(9)

フィルム委員会保管リスト(1)
……………(10)

会務報告……………(13)

3月理事会, ルーム日誌, 会員
異動

タンポポチェ 僧院再建協力募金者ご
芳名……………(14)

お知らせ……………(14)

お困り入会報告……………(15)

新入会員, 住所表示変更……………(15)

縦の会々員懐古

麻生武治

次の一文は麻生氏が、一高旅行部O
Bの会である縦の会に寄せられたもの
であるが、本会の古い会員でもあった
方々の思い出は、登山史的にも興味が
あると思われるので、同氏のご了承を
得て、ここに収録となったものである。

(資料委・中村純二)

向ヶ丘の健男児が潤歩した本郷通り
は、正に東京のラテン街と申しましょ
うか、二條の白線に柏の帽章は明治時
代の若者の憧憬でした。第一高等学校
旅行部縦の会のメンバーの中、個人的
に存知上げた人々を順を追って懐古さ
せて頂きます。

山口成一さん、渾名は直角、純真面
目でした。ウェストンと同時代に、一
高の学生服、麦藁帽子姿で槍の頂上に
立った直角さんが眼に浮かぶ。つづく
は日高信六郎さん。欧州アルプスの最
高峰モンブランに日本人として初登頂
したのは日高さんじゃあるまいか。同
氏は伊太利大使を退官されてからも山
歩きは忘れず、初夏栗駒山に三泊四日
の旅に御一緒したが、道中スカンジ
ナビア半島北端に行った話やヨーロ
ッパの山旅の話は尽きなかった。又木
周夫さんともよく日本の山を一緒に歩
かれたようだ。

縦の会長老の伴野清さんはスーパ
マンと申し上げるほか無し。日本ラ
ス キン協会の顧問をして居られ、毎月一
度の月例読書会でお目にかかる。"Mo-
nains are the beginning and last
of natural scenery"の名句は忘れら
れない。つづいての藤島敏男さんは僕
の山登りの大恩人です。大正六年九月
敏男さんの驥尾に付して日光湯元に泊
り、奥白根に登った。身軽な彼は登り
も降りも全く無駄足を踏まなかった。
一九三六年八月にはグリーンデルヴァ
ルのシャレー・ゾンネンベルクに滞在
して、ヴェッターホルンに御一緒した。
御自慢の英国製カメラ、ニューマンゴ
ルディア(レンズはシンクレアー)の
渋い作品がある。僕はその秋日本に帰
ったが、彼は三八年までスイスの山を
歩き、地味なブリュームリス・アルプ
ホルンやピータース・グラートなどに
登っている。晩年息子の泰輔さんから

歩いた時の談を「偏光鏡」という著書
に記している。そこにはユングフラウ
鉄道やゴルナーグラート鉄道、あるい
はケーブル、リフトを利用した登山が
記されている。終戦直後マッカーサー
司令部の命を受け国家公安委員長を務
めたのも英国風多趣味の人であったた
めか。

大正五年入学組には大島永明、黒田
正夫、戸沢英一さんが居て、皆さん旧
知だが、黒田大バケはあまりにも話題
が多かった。栃木県の招きで山の講演
を日光でしたとき、家康とレーニンと
もに独裁者と決めつけたため、憲兵隊
に呼ばれ、危うく拷問という所、同行
の初子夫人の懇願でやっと釈放とい
う一幕もあった。

大正七年組の佐分利一武ボンボンと
は発喃温泉天狗の湯に滞在、岩菅山の
天辺から雑魚川源流への滑降は快々哉

お知らせ
お電話
234 六六五九

日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み
図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

臍曲りのアダ名を貰
ったのは有名。彼と
同年期の辻二郎理学
博士を理化学研究所
の室に訪れたことも
ある。辻氏は自身歩
けないと駄句つて
Allgemeineと称し、
スイスやチロールを

でした。その夏八月七日に秩父宮のお供をして岩菅に登頂したが、殿下は御健脚でした。妃殿下もよく頑張られ、発哺の三日目は徒歩で志賀高原を縦断され、硯川で栗羊羹を御賞味の後、横手山を越えて草津まで歩かれた。南波二郎さんや入沢文明さんとは家族ともどもグレンデスキーを楽しんだ。沢本三郎はスキー理論派でグレンデでもやましかった。

大正八年の田辺和雄さん(元は浜田)はテレマーク・ボーゲンが得意だった。大正十一年の深田久彌君とは、僕が終戦後、金沢近郊湯涌谷温泉の白雲楼で進駐軍のスキーインストラクターをしていたため、金沢で親しくつき合った。ただ山仲間と共に御馳走になった白山の狸鍋は臭くてお世辞にも美味いとは申し兼ねた。一年下の木場貞寿さんは当時伯林三菱商事勤務だったが、ベルリンオリンピックの冬季スキー大会が南独ガルミツシュで行われた時、約一ヶ月間我々スキーチームが暮らしたヴッタースタイン山麓のペンションまで新巻と数の子の陣中見舞を届けて下さったのは有難かった。

大正十三年入学のバラ事石原厳ちゃんとも燕温泉を根城に前山や神奈の深雪で苦闘しました。彼は歌が好きでリンデンバウムは十八番。五月の立山室堂でタケさんはメロディをバラはペー

海外の山

地平線から

一冊の年報について話したい。

「地平線から」という奇妙な名で、毎年地球を舞台にユニークな行動をした日本人たちのことが記録されている。この三月に発刊されたばかりの三百八十八ページの大部が、その八冊目にあたる。制作は「地平線会議」。行動者の記録とネットワーク作りを目標に一九七九年に発足したボランティア集団で、私もその一員である。

ジャンルは全く問わないことをたてまえとしていて、ヒマラヤの氷河湖泳ぎから小型ヨットでの南極大陸一人旅、アフリカの難民キャンプでのボランティア活動など、それこそ千差万別の行動が記録されているが、その中で件数として目立つのは海外での登山活動だ。

一九七九年の記録をおさめた第一号から、八八年三月までの二年分をまとめた最新刊までに収録されている行動は千七十六件に及ぶが、うち二百四十件が登山に関連する事項である。

別に山を意識的に取り上げたというわけではなく、行動のパターンとして登山は完結性がはつきりしているためこうした本に収録されやすいのだろう。ちなみに第一号で最初に収録されている登山記録は一九七九年一月十八日から十九日にかけての鳴満則・秋子夫妻による「モンブラン大クローワール初登攀」である。

登山を「山登り」とだけ決めつけてしまうと、見えて来ないものがあることをこれらの年報は教えてくれる。四月号でふれたジョン・マルク・ポアバンはプロフェッ

ショナルとしてその一つの典型だが、普通の市民たちの間にも独自の挑戦がある。七年近くも地球を自転車ですまよいながらアコンカグアに登り、ナンガ・パルベットに挑戦(無論ヒマラヤのベテランと一緒に)した河野兵市、障害にめげず両腕だけで富士山やヒマラヤ五千峰に登った古市義雄、金剛山に連続二日登り続けた松永信男など人間のエネルギーを感じさせる行為が少くない。

昨年一年間に海外へ出かけた日本人の総数は九百六十万人を越え、ことしは確実に一千万人を突破する、と先頃出入国者数が発表された。日本人の海外渡航が自由になったのは東京五輪のあった一九六四年で当時の渡航者数は一年でわずか十三万人にも満たなかったことを考えると、あらためて時代の急激な変容ぶりに驚かされる。

登山はそうした中で初心者からベテランまで広い幅の行動者を生み出していったジャンルの一つである。勿論山登りのペースは日本のだが、好奇心あふれる登山者たちは必ずやまだ見ぬ氷雪や乾いた岩壁の世界を夢見て飛び出す衝動をおさえきれない。だが、「地平線会議」の制作スタッフが無意識に記録として残した過去十年の二百四十件の登山関連項目を眺めてみると、創造的な登山というものがいかに難しくなっているかを痛感する。高年齢者による高峰の登山といった人間の側の条件はさらに広げられるかもしれないが、エリアや登山方法について言えば一握りの限られた「超人」のみが新しい世界を切り開く可能性を持っているに過ぎないかもしれない。

年報「地平線から第八巻」は書店でも入手できる(二千五百円。「地方小出版流通センター」扱いとして注文)。自分たちの作業の宣伝めくが、そこには刺激的な何かがある。

(江本嘉伸)

海外の山

スと楽しい思い出です。東大地理在学中は文学青年で、妙高合宿中のローマンスも夢と申し上げたら、草葉の蔭で恨むだろうか。大正十五年のおこじよ事増田義彦さんもその仲間、涸沢や

乗鞍権現岳で直滑つての、ザラメ雪に大きなボーゲンを描いた春スキーは心地よい思い出です。以上老生のメモアールをそこはかとなく綴らせて頂きました。(一九九〇・三・二八)

D・K・スコットのこと

板倉勝正

私がスコットを知っているといつてもホントにする人はまずあるまい。ところが二十数年前にヒンズークシユの

私は三ヶ月の遠征中、靴を濡した事はホンの数回だった。

バンド・コールの中腹で、お互いに三〇〇メートルの処にベース・キャンプを張っていて、毎日往復していた。彼はミッドランド隊の隊長で私は中大隊の隊長だった。彼らは私達の眼の下の草原に三つのテントと二つのかまどを構え、快適に暮らしていた。中大のテントでは臭くて食えなかった山羊の肉も、彼らのところでは上手に臭いをぬいてうまく食わせてくれたし、ケーキまで焼いてくれた。

彼らも登山活動の往復によく私共のテントに立ち寄って、インスタント・ラーメンなどを悦んで食べて行った。下山してからもカプールの食堂やその近辺の公園などでたびたび会って親しくなった。私達の通訳は我々のことを「こんな貧乏な遠征隊ははじめてだ」とボヤいていたが、英国隊もドッコイ、ドッコイで、カプール・ホテルに泊ろうとして断われたと苦笑していた。

隊員が登山活動をしている間、役に立たない私はアフガン人の通訳と兵隊を伴って、よく彼らのテントを訪問した。テントの手前の小川のこつちから「タキシシノ」とわめくと、大抵は一番若いテリーという男がとび出して来て、私を背負って運んでくれた。だか

その後二年して私は欧米の博物館巡りをしていった。彼には連絡しておいたが、大陸旅行からロンドンに帰ったら便りが来ていた。いつでも来いという。それで十二月初旬粉雪の降る中をノッチンガムへ出掛けた。スコットに迎えられるでパブでビールとステーキを振舞われ、夕食は夫人の両親の家で御馳走になった。少女のような奥さんと長男

マイク(四歳)と黒のプードルがいる。マイクに紙製の財布をやる。彼曰く「フム、これは日本の財布だな?おばあちゃんイギリスの財布見せて」一同大笑い。ケン・ヴィッカーズ(隊員)夫妻も来る。一しきり遠征の話が弾む。

翌日は博物館の帰りに彼の家で御馳走になり、その後ミッドランド隊の歓迎パーティに出る。ここは山岳会のクラブで毎週木曜日に集会をしている。バンド・コール隊の全員と他に四、五十人の男女がいる。「ロイヤル・シート」でスライドを見て、水割りを飲んでいる中にテリーとヴィッカーズはスコットランドへ山登りに行くと言って帰る。また水割りを飲んで駄弁ついていると、機械をもった若い女がやって来てB・B・Cだが何か一言という。ピツクリしてスコットを見るとニヤニヤしながら己と何か話していればいいという。一杯機嫌でイロイロ喋った。夏の槍ヶ岳は空缶で一層高くなるとか、日本の大学山岳部では上級生が下級生をブンなぐるとか、日本の海外登山隊は年間四、五十隊あるとか、皆がビツクリするのが面白かった。この録音は翌日B・B・Cの見学に行った時貰って来た筈だが、二十年以上たった現在ではどこに取ったか全く憶い出せない。



奥多摩・自然保護

パトロール

市倉 金蔵

東京の奥座敷といわれる奥多摩、とくに私の住む秋川溪谷は多摩川と比婆溪谷も浅く、家族向きであることから海水浴ならぬ淡水浴に観光客も多く、一シーズンに約一六〇万人、そのうち約三十万四十八万人がハイカーです。こうしたことから必然的に観光公害が発生しており、自然公園指導員としては環境衛生(ゴミ等)、風致保護(植物等)、鳥獣保護のパトロールを能動的に行っております。とくに最近では山野草や、山菜ブームで私有の庭先まで荒らされております。ちなみに奥多摩にはどのくらいの種類の花が見られるのだろうか。『奥多摩の花』の著者山本二郎博士は著書の中でスライドに撮影したものの八百種、花は見えていないが、多くの成育しているのを知り、合計すると千種ぐらいの花が見られるのではないかと述べております。しかし、貴重な

ものが盗掘されており。愛好家による被害もさることながら、盗掘品の販売を目的としているものは、一株いくらと言ふ計算づくや、希少な植物を根こそぎ掘り取って行くため、クマガイ草、エビネ、カタクリ、レンゲシヨウマ、ウチヨウランの群生地が一シーズンで壊滅しております。お隣の山梨県の県境に接している関係から「山梨県高山植物の保護に関する条例」や、防止対策資料を提供していただいたり、日本自然保護協会の奥多摩プラントキヤンペーン(奥多摩の野生植物を守る運動)に参加しポスターの掲示や、チラシの配布も重要な仕事となっております。

自然公園指導員手帳からパトロールの一日を抜粋してみました。

○月○日

今日は盆堀川の江戸っ子猿の動向と新種ナガレタゴカエルの生息地を歩いてみる。沢戸橋を渡り、盆堀の集落までは相変らず採石のダンプカーの往来が激しい。猿の群は今日は時間が早かったのか、まだ集落までは下りて来ていない。集落を抜け採石場を過ぎると、やっと山間の静けさを取り戻す。やがてナガレタゴカエルの生息地だ。

◎ナガレタゴカエル(新種)別名だきつきかえる。分類学上から都立大の草野保先生が研究を始める。特徴は①胸

に斑点がある②親指にタコ(吸盤)がある③十一月から四月水(清流)の中で生活し繁殖する④繁殖期は水温四C(まだまだ生息は不明な部分が多い)。

◎いままでに生息が判明した部分
①水温四度Cの繁殖期は外敵がない(二月~三月上旬)②例えばムササビのような体形の皮膚が大きいのは、水中で長く呼吸しなくてもいられるように工夫されている(皮膚面積が大きいため息の長い潜水がしえられる)③あまり鳴き声を聞かない。音感機能が発達していないのか? そうしたことから、繁殖期の水の中では動いたこと、まず抱きつき、お互いに信号を出し合い離れて行き、ディスプレイの合意の出来たものがペアで川を流れて行く④卵は石に産み付け、一般の蛙より卵はずっと少ない。

この新種の蛙は清流の特定地域にのみ生息していることである。何時までも住み良い環境を守っていききたいものだと思う。(環境庁自然公園指導員・日山協自然保護指導員)

私のヒマラヤ

メラ・ピーク

(六六五四)

福田智恵子

今回のメラ・ピークに参加するきっかけとなったのは、一九八七年十月の

エベレストトレッキング田部井さんのツアーが始まりました。玉山へ行った帰りの汽車の中で一言でした。ヒマラヤで六〇〇〇の登れる山があるのよと言ってくれた。私はその時、夢ではなさそうだった。年をとらないうちにねと言った。それから一年たつてメラ・ピークの話があった。

一九八九年三月十九日、待ちに待ったその日がやってきた。特別なトレーニング等はしていないが、月に二回の山行と職場での昼休みになわ飛びを三百回程度。メンバーは女性四人、私のほかは六〇〇級の経験者である。私は少々気落ちしていた。しかし行く以上は登りたい、頂上に立ちたいと思つた。

成田をAT301便にてバンコク経由カトマンズに入る。ルクラ便は二日間のキャンセル待ちで入れたのは幸運だった。十四人乗りのツインウオッタ機はカトマンズ、ルクラ間を僅か三十分で飛ぶ。空港にはシェルパ、ポーターが待っていた。昼食を済ませ、いよいよキャラバン開始、村は春であった。桜草や、沈丁花が咲いていた。石楠花の森を高度を上げて歩き出す。今年には雪が多いというので皆二重靴を履いての行動になったチュタンガー、チエトル、ラザトルツラ四六〇〇の峠越えが割り合いうまく越えることができ

たのでホッとする。風が強くて休む気にもなれず次のテント地へと歩く。チエトルワル四一六五で頭痛がしたが、朝になり快調であった。尾根に登ると始めてメラ・ピークが見えた。

ここからはグングン下る。残雪が多く太股までスッポリ入ってしまうので皆苦労していた。三六〇〇の高度が下つたためか、全員快調、食欲もあつた。高度四七五〇の所にある岩小屋に四人が寝られる広さがあったので泊ることにした。積雪二〇、顔に雪が舞いおりてきて冷たいテントを頭からかぶって寝る。雪崩の音があちこちから聞える。ヒマラヤの山中に身を横たえていることを私は実感としていた。BC五三〇〇に入り、ラッセルが深く苦しかった。五七〇〇にC2幕営、いずれも腰までのラッセルに苦しむ、ゆっくりとした歩調。

四月一日アタック日。マイナス十七℃、全員で頂上をめざしてゆっくり歩いた。隊長は何度も大きく深呼吸してねと気づかっては休むペース。エベレスト、ローツエ、ヌプツエ、マカルー、チャムラン、クスム・カングル、アマダムラムも、くつきり見えた。

頂上が間近かなことを感じていた。すると隊長が、頂上よと大声でいう。ついに四人は頂上に躍りだした。嬉しく

て涙が出る。私は感激と感謝の握手を隊長、シエルパに求める。風もなく穏やかな山頂だった。またいつの日にかヒマラヤへ行きたい。

十二年目の

再会と出会い

山田 智子

昨年十一月二十五日、群馬県山岳連盟遭難救助隊々長をされている西山年秋氏が群馬県顕彰を受けられたのと、文部省全国社会体育優良団体表彰を受けた沼田山岳会の祝賀会が、川場村の「ホテルSL」で開かれた。総勢三百余名からなる盛会なものであった。

西山氏の今回の顕彰は、永年に亘る山岳救助活動の実践によるものであった。谷川岳の遭難救助ではなくてはならない人であり、大勢の岳人がお世話になっていることはよく知られている。私が西山氏に初めてお会いしたのは十二年前の主人の一ノ倉沢での遭難の時であった。その後、岳連の行事や谷川岳の山開き、閉山式などでお会いさせていただいている。今回の祝賀会のお誘いには私にまでと恐縮したが、主人の遭難でお世話になった救助隊の方々にはお会いする機会がなく、お祝いの気持ちに、もしかしたら皆さんにお会いできるかもしれないという期待も

かけて出席させていただいた。

祝賀会ではその救助隊の数人の方々と、救助の応援を申し出て下さった方に十二年目にして直接お礼を申し上げることができました。皆さんが主人のその時のことを覚えていてくれたことは、私にとって嬉しいかぎりでした。

当時、雨の中を真夜中までかかった救助に、意識不明でもせめて生きている間に下ろして欲しいと、私は一ノ倉沢の出会いで作業の灯りを見上げながら一生懸命祈っていた。今回主人を背負って下さったという方にお会いして、「俺たちも、最後にキスができるくらいの状態と奥さんに渡したかった」と言っていたとき、あの時祈っていた気が、救助隊の方々に通じていたような錯覚を味わうことができた。人生の最後にこんなに優しい方に背負われ、素晴らしい山男達のお世話になって……。さらに主人は、最後まで意識不明のままだったと思っていました。「お世話になります」と、背負われながら言っていたと聞かされ、その光景が浮かんで声をつまらせた次第でした。

二次会も皆さんの仲間に入れていただき、真夜中までストロブを囲んで山の話と酒に酔わせてもらった。救助隊の方々とは十二年目の再会でしたが、今回が初めての出会いのようでもあった。また、世界的な人材養成と山岳救

助活動により表彰された沼田山岳会の方々や、各地で活躍されている大勢の方々との出会いも一つ一つ忘れられない祝賀会になりました。最近、眼の病気のため声で人を判断しておられるという西山隊長に、私は反対に励げまされて帰って来ました。その人柄が救助隊の皆さんの姿を象徴しているのではと、日が過ぎるにつれて思われる今日この頃である。(越後支部)

シベリアの三角点

水野 公男

一九八八年、中国ハルピンの黒龍江大学での夏期留学による中国語学習に参加した。

学習終了後、私たちは、北京発モスクワ行直行列車でイルクーツクまで四十六時間の旅に出発した。

ソ連には四十三年ぶりの再入国で、ベレストロイカの息吹きを肌で感じられるであろうかと期待は大きかった。

満州里からザバイカルスクに列車での国境越えは、黒龍江大学の一年余にわたる努力の結果、日本人団体では私たちが戦後はじめてだという。

いかめしい中ソ国境警備隊員の緊張した姿、草原のかなたまで続く鉄条網、車窓からのシベリア鉄道沿線の風景は

昔と余り変っていない。

イルクーツクでの市内観光、七十* 離れているバイカル湖は余りの大きさに駿河湾を眺めている感じがする。

バイカル湖畔で、アンガラ川河口のリストビヤンカの部落は、夏というのに観光客は私たち団体五十名と、キエフ大学生十二名のグループだけだった。

ホテルで用意してくれた昼食を持参して登り一時間のチェルスキー山までのハイキングでひと汗かいてしまう。頂上には小さな休憩所があり、バイカル湖南部を望める展望台となっている。

休憩所から先はちよつとした岩場で

三国登山隊公式報告書の発刊

先に三国登山隊の写真が読売新聞社より発刊されましたが、このたび本会より公式報告書がまとまりましたのでお知らせ致します。

* 発刊日：五月二十五日(総会当日にも販売いたします)

* 内容、仕様：報告、学術・科学報告資料の三部構成でB5版、三百五十頁、頒価五千円

* 編集、発刊：登山隊編集委員会

* 販売取扱：日本山岳会事務局



シベリアの三角点

ヤのヌン峰西稜に挑みましたが、あとわずかのところでタイムアップとなりました。兵庫・守田治夫(六七九二)

今日も冠雪した北アの山々が高山市内から鮮やかに眺められます。周辺の間も紅葉が終わり、あとは冬に向かって一直線です。

* 岐阜・伊藤 茂(六八三七)

山行は県内が多いのですが、八月中旬に八ヶ岳に登りました。

* 秋田・柳谷正義(七〇一〇)

ここ数年台湾の山へ行っています。玉山、雪山、八通関山、南湖大山と登ってきました。

* 神奈川・大野義徳(七一一五)

日中友好梅里雪山合同登山隊に参加しています。

* 福岡・倉智清司(七一三〇)

近作二句。「恙なき貌していたり蝸牛」「ひと夏の水のんでいる岩蜥蜴」

* 東京・横田茂雄(七三三六)

会員通信特集(4)

兵庫県高校山岳部顧問十四名からなる遠征隊で八月、パンジャブ・ヒマラ

かず。私自身も何度も失敗で、結局自分が第二登に成功。偵察と合わせて八日間の日程でした。明年の厳冬期には鳥海山の新山の北壁初登を目指して頑張っています。

* 山形・佐藤淳志(七四四六)

無線機(SOMHZ)を担いで月に一回くらい近くの山に登っておりま

* 静岡・田中貞夫(七四五二)

リゾートブームで狂乱の九州を後に、七月京都に来ました。千年の古都も異常な地価高騰の波にもまれ、周辺の山や川でも大文字山のゴルフ場計画や、賀茂川ダムの計画等々、ひたすら金を動かすことだけを目的にした様な土木工事が企まれているようです。

* 京都・羽賀克己(七五〇〇)

ネパール画集(一九六九〜九〇)を山溪から七月発売予定です。

* 東京・藤江幾太郎(七五九三)

十月三十日、遠藤京子さんのお世話で京都山岳会として男女十二名、平均年齢五八歳のパーティの一員として台湾・玉山に行っていました。

* 京都・小川九三雄(七六〇三)

今夏もノルウェー・北極圏の島、スピッツベルゲンの調査に出掛けました。尾瀬の入山料が問題になっていますが、山と人との関係をきちんと考えたいと思い、大雪山で登山者の数をすべてカウントする調査を始めたところです。

* 北海道・小野有五(七七三五)

本年は一等本点十八山登頂済み。

* 京都・松浦勇次(七八三八)

来年は六月一〜三日、全日本登山大会を岐阜県で開催します。場所は穂高、槍、双六、笠、錫杖を予定しております。

* 岐阜・島田 靖(七八五八)

よる年波なんていうと笑われますが、腰の具合、足の向くまま気の向くまま最後の山を歩いております。山岳会の山行も色々の地からの人達に会えて楽しいものです。どうか我々の参加できる会をお願いします。

* 新潟・松本英一(七八六五)

今夏は六人、四〜五日で槍ヶ岳登頂。家族に病人あり、近郊のハイキングで健康保持につとめる。

* 大阪・西本正行(七九三二)

韓国山岳会の会員と個人的な親交を

深めつつ、今年で十八年になります。韓国各地に友人が居り、この夏は韓国山岳会の会員二名を劔岳に案内し、十月にはこちらから韓国へ行き紅葉の雪岳山を楽しんできました。

神奈川・和田誠一(七九七二)

「温泉ハイキング」という小さなガイドブックがまとまり、次は「東京街歩き」に取りかかります。来春は「長寿の里」をテーマにフンザに出掛ける予定です。

東京・伊佐九三四郎(八〇九二)

大阪ぐらし一年九ヶ月、来春には「帰参」が叶うと思います。十二月五日から欧州周遊に出掛け、今年三回目の海外です。「古稀すぎて立冬の朝現役で」。大阪・神谷恭平(八一六二)

秘湯「鶴の湯温泉」で会員の皆様の御利用をいただき有り難く思っております。秋田駒、乳頭山においでの際はお立ち寄りいただければ幸いです。

秋田・佐藤和志(八一七六)

十月、約半月の日程でカナダ・ロッキーの山々のハイキングを楽しんできました。

北海道・新庄久志(八四九二)

【自然保護随想】

アメリカの二人の自然保護主義者

ジョン・ミュア(一八三八—一九一四)と云えば「国立公園の父」、シエラ・クラブの創立者として著名です。ほぼ、同時代にもう一人の自然保護者がいたことを最近になって知りました。ギフォード・ピンショー(一八六五—一九四六)です。

ピンショーは富豪の家に生れ、父の生業にあきたらず、父が口にした一言がもとで森林管理を志し、フランスに学んだ後、帰国してアメリカの初代森林局長官になりました。アメリカ自然保護運動草創期のマーシユ、パウエル、シュルツ等の思想的影響を受け、「CONSERVATION」の新語を作った人でもあります。

ミュアの「自然を自然として残し、破壊的商業主義から「美しい原生林」を残さねばならない。人間が自然に触れる機会を確保しなければ人間性そのものが破壊される。」との思想に対して、ピンショーは「森林は保護するが、森林の持続的生産により人類の繁栄のために安定した森林の供給を確保する。つまり自然の資源を科学的

・合理的に管理する。」との思想です。この二人の自然観は異っており、ヨセミテ国立公園内のヘッチ・ヘッチー溪谷のダム建設をめぐる意見が真正面から対立したと伝えられております。

アメリカの自然と文化の接触を一、開拓時代、二、森林管理の時代三、森林多目的管理時代に分けるとすれば、さしずめ現在の日本は、自然の商業主義的多目的利用時代とも言うのでしょうか。やたらとスキー場、ゴルフ場の開発が進行しつつあるやに見受けられます。

二人の先人が生きた時代を通じて、一、国立公園の発祥と規模と管理にみるアメリカの自然保護の芽生えとその考え方
二、森林保全の重要性の視点
等を再認識させられました。

昨今はこの二人の意見の対立を超えて、人類生存のため地球環境の保全が切実な問題となっています。二人は天国で地球環境問題についてどんな議論をしているのでしょうか。はたまた「森林保全の原則は、自然に手を加えないことだ。」と未だに激論を闘かわしているのでしょうか。興味は尽きません。(麦倉 啓)

人生の心の糧と趣味の山旅は、中高年でも情熱を傾けて登高しています。

一月茅ヶ岳、五月三ツ峠山で岩登り、六月富士山、十月二八〜二九日は越後の秘境、丹後山から大水上岳、兎岳そして中の岳と縦走。実に快哉。

神奈川・松岡 繁(八五五三)

十月十五日、永年の目標であった秩

父の武甲山への二〇〇回の登頂を達成。丁度二十年かかりました。山も登山道もすっかり変わりました。引き続き三〇〇回に挑戦。

千葉・松本寿一(八六三四)

山田昇のマッキンリー遭難では大変お世話になりました。

群馬・八木原啓明(八六五四)

八六歳の老齢を迎え近くの山をゆくり登っております。今年は乗鞍・斑尾に登りました。

長野・下崎 宏(八六七二)

続くー

《詩》二月の春・石田 喜八

S 駅にはこの界隈の山に不似合なキスリング姿の学生の一团がいた。峠への道は古い街道らしく、朽ちかけた茶屋がいくつかあった。山里の梅はまだ冬構えの貌である。

いつも冬の日が昇る前の麓歩きでは、硬直するような冷気に包囲され、微風にも頬が痛むほどだが、今日は谷合いの暗い道でも全く緊張感がなく。歩を重ねると厚着に汗が滲んでくる。

傾斜地に建つ家に朝日があたり始める。少女の明眸の如き澄んだ光である。終焉を予測させなかった冬が俄かに崩れた二月の春。
老アルピニスト夫妻が捷徑の分岐に入っていた。

頂近くでは名残り雪が凍結して、僅かに登山者に抵抗を試みているが、歓声の前に容易く屈している。若いグループが鍋を下ろして炊飯をはじめた。
午後の陽はすっかり酔眼になった。

一九九〇・二・一八伊豆ヶ岳



図書 紹介

地上最強の登山家

山田 昇

読売新聞社編

一九八八年二月二十四日、山一筋に生きマッキンリーに逝った、山田昇の写真と文章による追悼の本である。

彼の登った八千峰九座の見事なカラー写真、誰にも親しまれた好漢「昇」の肖像。山での彼は、本当に生き生きとして、いまでも問いかけているようである。

追悼集には彼を語るに、この人を措いては他になし、の八木原罔明氏の「山田昇の39年と15日」は少年時代から一流登山家に成長していく過程、ヒマラヤ登山の成否、仲間の遭難、哀歎と栄光、そして死。夢追い人の著者が愛弟子の「夢」を語る素直で明快な追悼文。
「山田昇のアルパインスタイル」は読売新聞運動部記者迫田泰敏氏によるもので、三国友好隊に参加（北面）した記者の目を通しての、山田昇が残した近代ヒマラヤ登山の足跡を辿ったも

の。輝かしい、彼のスーパークライムの記録が、登山史にきちっと位置づけられている好記録文。

「山田昇はこんなやつだ」は読売新聞記者富野富士郎氏による、都会での横顔とエピソードで興味深い。(I)赤坂MARO物語、(II)強さの秘密、(III)自然と仲間、(IV)女性、(V)登山、と異なる角度から眺めており、著者も三国隊(南側)に参加し、縦走してBCに下って来た山田に会っている。限りない追慕の情が溢れた温い読物になっている。

「昇のこと」は実兄豊氏の謝辞。

△今夜もまた、腕時計のアラームが鳴りだした。Vと、遺品の時計について述べられている。これほどの辛いことを淡々と語る、弟への限りない思慕と、万斛の涙をこらえた言葉に打たれる。

一九八九年十月二日 読売新聞社刊
一一一頁 定価四八〇〇円
(大塚博美)

氷壁に刻む

山田昇・八木原罔明

二人の登攀史―

八木原罔明著

八千峰十四座の完登を目前に、マッキンリーで逝った故山田昇氏との出

合いから、共にヒマラヤの冬期バリエーション初登攀成功まで「群馬岳人のヒマラヤ登山」の二十年に亘る、壮絶な山との戦いの記録である。

群馬の八木原一家といえ、実力者揃いで有名である。親分格の著者をリーダーに宮崎、山田、斉藤ら、多士済々である。個性豊かな彼等が、いろいろなグループに参加しながら一山一山成長していく過程が綴られている。

第一章「二人の出会い」では、山田昇の生い立ちと出会いを、同郷の兄貴分でなくては語れない故人の側面が偲ばれる。第二章「三章」ヒマラヤへの道程I・IIとして、初のダウラギリIV峰の体験、以降幾多の登山、やがてエベレスト登頂を含め、念願の冬期アンナプルナ南壁の初登攀まで、仲間の交遊、遭難、哀歎を含め、より困難を求めた厳しい山行が語られている。

特に第五章「山田昇、マッキンリーに逝く」では彼の夢と遭難報告。壮絶な戦いの歴史では何故山に登る？Vとして著者の登山観が述べられている。

「ヒマラヤは生命を賭けるに値する対象」として位置づけ、「厳しい登山を続ける限りいつ死んでも不思議でない」とし、「登ること」は「生きること」であると価値を見出し、「世間の人々が一様に慾する安穩も安定も、多

くのを捨て続けていくことである」と素直で澄明に語られている。しかし、一方の「生命を大切に」の安全登山と対比して考えるとき、その語りかけは重い。八十年代、登山界は屈指のクライマーたちククチカ、加藤、植村、山田ら―を失ったが、それへの鎮魂か。

平成二年一月十日 上毛新聞刊 一二頁 上毛文庫第三回配本 (大塚博美)

仲間と旅の思い出

一 高旅行部縦の会編

『一高旅行部五十年』(昭43・12刊) 『失いし仲間』(47・3刊)、『一高旅行部の足あと』(53・6刊) が刊行された当時、慧眼の山岳史家山崎安治氏は登山史の貴重な一資料との指摘を本会々報二八八号、四〇五号に夫々述べているが、その四冊目にあたる本書がこの度同じ縦の会から上梓された。過去の三冊に未収録の、古い人々、例えば守島伍郎、日高信六郎、森喬、伴野清、黒田正夫、石原巖、小林太刀夫氏の紀行随想がほぼ半分と、あとの半分はその後亡くなられた方々の追悼が親しい友人によって語られている。その多くが本会々員である点も看過し得

ないところである。

縦の会の同人ではないが、この会と特別に親しい麻生武治氏が二篇を寄せているが、いかにも同氏の巧みな話を聞いているような書きぶりである。

「随想」には前記諸氏その他の、今では忘れられた文章が各種の古い雑誌から拾い出されているが、その労は大きかったと思われる。また小林氏の「高齢者の安全登山について」は五十七年十月本会での講演要旨に加筆されたもので現代の高年登山者にとって有益な一文である。

「追悼」の庄巻は日高氏筆の守島伍郎さんの思い出であろう。二〇頁に及ぶ長篇でいかにも日高さんらしい行き届いた文章で、守島氏のことをよく判るばかりでなく、日高氏を知る上にも見逃すことができない。黒田正夫氏の追悼(木下是雄氏の一文)、石原巖氏のものなど、元本会員であり『山岳』にも記録されていないだけに貴重であろう。また本会員ではなかったが、会員のなかに友人も多かった田辺和雄氏や、塩川三兄弟として、古い会員には友人の多かった人々の末弟野依金城氏の追悼も載せられている。

前三冊と比べるとやや落穂拾いの感がないでもないが、大正から昭和初、中期にかけての日本の登山界を知るのに役立つことは間違いない。

挿絵には黒田正夫氏のスケッチが多く用いられ、写真も単に思い出というばかりでなく、登山史の資料と見られるものが少なくない。本会長老の伴野清氏(大正五年七月槍穂高縦走『山岳』11の3)が九十三歳で矍鑠とされている写真もある。第一冊以来編集に努力

報告

「フィルムからビデオテープ」へ

フィルム委員会

フィルム委員会では、事業の一環としてこれまで山岳映画のフィルムや、ビデオテープなど映像作品の収集に努めてきております。お陰様で、数多くの貴重な作品をご寄贈いただき、フィルム・ライブラリーとして整理いたしました。会員をはじめ関係各位にご報告と共に厚く御礼申し上げます。

毎年、四、五作品を考えており、本年度は左記作品をビデオテープにする予定です。ビデオ化する作品のリスト・アップにつきましては、山岳史上貴重な記録、珍らしい作品、資料的価値のある作品などを考慮しながら検討し決めております。

記

しかし、ご協力頂きました作品のなかにはフィルムによる作品が多く、その場合のご利用方法はごく限られてまいります。

そこで、近年ビデオ機器の普及にともない、これら貴重な映画作品を手軽に、また多くの方々にご利用して頂くため、フィルム委員会では、映画フィルムからビデオテープにトランスファ(転換)する計画を進めています。全作品というわけにはいきませんが、

- エベレスト 1924年
 - ナンダコット征服
 - 立教大学山岳部 1936年
 - 黒部の秋 昭和4年 別宮貞俊
 - スキーツアー 昭和4年・5年 別宮貞俊
 - 冬のロータン峠 1930年
 - パンジャブヒマラヤ 三田幸夫
- なお、ビデオ転換が出来ましたら、映写会を催しましてご観賞いただけたらと思っております。

を傾けられた中村純二氏の労を多しむたい。本書は限定四〇〇部の非売品だが本会事務所または中村氏において頒費三千円で求めることができる。

一九九〇年三月発行 B5判二〇四頁 (望月達夫)

フィルム委員会保管リスト (1)

録音テープ (カセットテープ) 保管リスト 1

日本山岳会フィルム委員会

No.	面	題 名	時間	録音年月日	講 演 者・演 奏 者 等	寄贈者	備 考
1	A B	マナスル登頂一周年記念随想特集 (A Bとも)		1957. 5	松方, 竹節, 三田, 加藤, 木原, 榎		
2 }		蒙古チベット旅行 I (昭和14~25年) (A Bとも)	90分	1957. 9.30	木村久緒 (木村肥佐生)		
3		同上 II (177回小集会) (A Bとも)	90分				
4	A B	英国山岳会 100年祭に参加して (年次晩餐会講演・A Bとも)	90分	1957.12. 2	榎有恒		
5	A B	ロイトホルト氏のスライドの会		1957.11. 9	(スイスエベレスト・ローツェ 登頂隊員)		
6	A B	冬山登山の心構え (A Bとも)	90分	1957.12.10	榎有恒, 日下田実, 大塚博美		
7	A B	アルパインクラブ (英国) 100 周年 記念晩餐会出席報告 JAC 小集会 (第179回) (A Bとも)		1958. 1.23	松方三郎		
8	A B	JAC 小集会 (第181回) 雪崩シンポジウム (於日体協)	90分	1958. 2.18	金坂一郎, 渡辺公平, 大塚博美 谷口現吉		
9	A B	JAC 小集会 (185回) ニュージーランドの山登りについて	90分	1958. 9.12	松方三郎		
10 }		気象のシンポジウム (186 回小 集会) 「ヒマラヤの気象」		1958.10. 7	大井正一, 久米庸孝, 村上多喜 雄, 辰沼広吉, 山田二郎, 藤平 正夫		
11							
12	A B	JAC 小集会 (187回) 黒部の今昔について (A Bとも)	90分	1958.10.24	冠松次郎, 沼倉寛二郎		
13	A B	ヒマラヤをめぐる色々な話 マナスル・ソング		1958. 1.23 1959	島田巽 チベット人		
14 }		JAC 小集会 (188回) (A Bとも) 高山病と凍傷, 凍死について		1958.11.19	杉本良一, 辰沼広吉		
15							
16	A B	JAC 小集会 (189回) 登山用防寒具について (A Bとも)	90分	1958.12. 8	鳥居, 加藤, 初見, 松丸		
17	A B	第一次ヒマルチェリ登山隊員発表		1958.12.12			
18	A B	JAC 小集会 (197回) (A Bとも) 第一次ヒマルチェリ登山報告会		1959. 7.31	村木隊長他各隊員		
19	A B	JAC 小集会 (200回) 記念講演 於国際文化会館 (A Bとも)	90分	1959.10.14	冠松次郎, 高野鷹藏, 武田久吉		
20	A B	ニマテンジン君追悼法要 歌(B) マナスルの呼声, シェルパ可愛や		1959.10. 4	(A) 築地本願寺における (B) 竹節作太作詞		
21	A B	JAC 小集会 (201回) (A Bとも) 雪崩に関するシンポジウム	90分	1959.11. 7	大井正一, 木下是雄, 山田二郎 (司会) 金坂一郎		
22 }		JAC 小集会 (202回) ① ② ③		1959.12. 5	浜野正男, 千石莊之助, 山田二郎 (司会: 太田理事)		
23 }		冬山遭難予防に関するシンポジウ ム					
24							
25	A B	JAC 小集会 (206回) 南極越冬隊報告 (A Bとも)	90分	1960. 7. 5	村山雅美 他		
26	A B	JAC 小集会 (209回) (A Bとも) マッキンレー登山について	90分	1960. 9.17	吉阪隆正 (早大隊) 交野武一 (明大隊)		

No.	面	題 名	時間	録音年月日	講 演 者・演 奏 者 等	寄 贈 者	備 考
27 }		JAC小集会 (211回) 雪崩に関するシンポジウム		1960.11.14	金坂一郎, 村木潤次郎, 明大・専大・早大		
29	A B	ダイレン・ファース氏講演 (A Bとも)		1965. 1.19	(エベレスト西稜報告他)		
30 }		日本山岳会創立60年記念講演会 (於 久保講堂)		1965.10.15	松方三郎, 榎有恒 武田久吉, 桑原武夫		
32	A B	富士山と私 (JAC小集会第233回) (A Bとも)		1967. 8.16	松方三郎		
33	A B	エベレスト南壁他偵察の報告会 ② (A Bとも)		1969.11.16	宮下秀樹他		
34	A B	エベレスト偵察の報告会 (A Bとも)	90分	1969.11.26	宮下, 小西		
35	A B	日本山岳会エベレスト登頂 (カラースライド解説・A Bとも)		1970. 5.11	木村勝久	毎日新聞社	
36	A B	尾瀬の自然を守る会 (発表)		1970.11.27	平野長靖		
37	A B	故 松方三郎氏追悼会 (於 OAG 会館)		1974. 4.29	榎有恒, 藤島敏男, 加藤泰安氏 による追悼講演集		
38	A B	日本山岳会昭和50年総会 (第3利根川ビル)		1975. 4.30			
39	A B	日本山岳会創立70年記念講演会 " (A Bとも)		1975.11.20	小西政継, 榎有恒		
40 }		日本山岳会フィルム委員会 設立準備会 (A Bとも)		1981. 4.17			永久保存
42	A B	科学研究委員会 第8回講演会 「山の意外な顔」 (A Bとも)		1981. 5.20	式正英		
43	A B	科学研究委員会 講演会 「低圧トレーニングの実際と応用」	90分	1981.10.23	島岡清		
44	A B	科学, 医療委員会合同講演会 「高齢者の安全登山」 (A Bとも)	90分	1981.11.12	小林太刀夫		
45	A B	「快晴の山」 (JAC 三水会) (A Bとも)		1984. 6.20	織内信彦		
46 }		「風来坊」 (JAC 三水会) (A Bとも)		1984. 9.24	麻生武治		
48	A B	「ラダックのゴンパ巡礼」 (会員懇談会) (A Bとも)	90分	1984.10.15	山口一孝		
49	A B	冬のロータン峠 (映画に寄せて)		1985. 4.13	細川沙多子, 宮持互		
50	A B	ネパールの舞踊曲, 民謡, 歌謡曲 (A Bとも)	90分	1983.12.	(現地収録したもの)	折井健一	
51	A B	私の山旅 (A Bとも)			榎有恒		
52	A B	山 の 話 (A Bとも)			榎有恒		

録音テープ (カセットテープ) 保管リスト 3

日本山岳会フィルム委員会

No.	面	題 名	時間	録音年月日	講 演 者・演 奏 者 等	寄 贈 者	備 考
53	A B	武甲山の自然を考える (A Bとも)	90分		清水武甲		
54	A B	字目の唄げんか、ソウチコ囃子			奥宇目民謡保存会	東九州支部	
55	A B	マナスルソング (カンブングンソング)		1939. 5.	現地録音 (チベタンより)	松田雄一	
56 } 57		「山岳における危機」 (A Bとも)		1982. 3.12	Dr. Jack D. Ives		
58 } 59 } 60	A B A A	「ヒマラヤの生態系と現況」① ② ③ ④ ⑤		1985.11.30	川喜田, 渡辺兵力, 渡辺桂, 中尾佐助, 沼田眞		
61	A B	一高旅行部の足跡 (第2回山岳史懇談会) (A Bとも)		1974. 3.18	中村純二他		
62 } 63		村井米子さんと語る (婦人懇談会) (A Bとも)		1984. 9. 8			
64 } 65		今井喜美子さんと語る (婦人懇談会) (A Bとも)		1984. 9.26			
66 } 67		黒田初子さんと語る (婦人懇談会) (A Bとも)		1984.			
68	A B	多田等親氏関連 (A Bとも)					
69	A B	日本山岳会創立80周年式典 (A Bとも)		1985. 8.24			
70	A B	日本山岳会創立80周年式典 および晩餐会 (A Bとも)		1985. 8.24			
71	A B	アルプスヨーデル (A Bとも) A ドイツ, オーストリア B スイス					
72	A B	スイスリードとヨーデル (A Bとも)					
73	A B	第40回ウエストン祭 (於 上高地) (A Bとも)		1986. 6. 1	小林俊樹, 佐々保雄他		
74 } 75		シンポジウム 「ネパールの自然と生態」① ②		1986.11.15	川喜田, 大場, 杉浦, 小島, 新 津, 千葉		
76	A B	日本山岳会創立80年 記念 「山を讀え, 山を究める」		1985. 8.24	トライジョン解説		
77	A B	第41回 ウエストン祭 (A Bとも)		1987. 6.	吉沢一郎他		
78	A B	第42回 ウエストン祭 (A Bとも)		1988. 6.	佐々保雄		
79	A B	「安曇野の歌人たちとその周辺」 (三水会) (A Bとも)		1987. 7.15	蜂谷緑		

録音テープ (カセットテープ) 保管リスト 4

日本山岳会フィルム委員会

No.	面	題 名	時間	録音年月日	講演者・演奏者等	寄贈者	備考
80 7 81		チョモランマの気象 I, II, IIIと質疑応答 (於 JACルーム)		1988.12. 9	奥山巖, 宮田賢二他		

録音テープ (カセットテープ) 保管リスト 別 (16m/m 用)

日本山岳会フィルム委員会

No.	面	題 名	時間	録音年月日	講演者・演奏者等	寄贈者	備考
	A B	映画「氷河への旅」 解説 (ジュガールヒマール探査隊)	30分	1958. 3~6	教育映画配給	風見武秀	
	A B	映画「ヒマラヤ氷河の旅」 解説 (A Bとも)	60分	1958.	山映プロダクション	"	
	A B	映画「ランタンヒマール」 解説 (A Bとも)	17分	1958.	風見武秀作品	"	
	A B	映画「劔岳・岩と雪の王国」 解説 (A Bとも)	30分	1962. 4.	ホープ	"	
	A B	映画「ジュガールヒマール」 解説 (A Bとも)	28分 28分	1958.	NTV	"	

ビデオテープ (VHS・β) 保管リスト 1

日本山岳会フィルム委員会

No.	題 名	種類	時 間	制 作 者	制作年	寄 贈 者	備 考
V 1	北アルプス (空撮)	VHS				大森弘一郎	

続 く—

・会務報告

三月理事会

三月十五日 十八時四〇分
場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会
長、松田、西村、山本、小林、入沢、
小倉、松本、石橋、藤井各理事、太田
監事、小倉、橋本、鳴原、大島各常任
評議員
委任出席 重広、織田沢、早坂、関口、
穴田、伊丹各理事、飯野監事

〔審議事項〕

- (1)平成二年度予算案承認の件
西村常務理事による最終案を承認。
- (2)平成二年度事業計画承認の件
松田常務理事作成の原案を承認。
- (3)第一次パミール登山隊承認の件
高所登山委員会、青年部合同による
第一次パミール登山隊を一九九〇年七
月〜八月にかけてレーニン峰周辺に出
したい旨説明があり、本登山隊を日本
山岳会の名で派遣することを承認す
る。
- (4)海外登山隊に対し推薦状交付の件
稲門山岳会カラコルム登山隊一九〇
一年に対し推薦状の発行を承認する。
- (5)ヒマラヤン・アドベンチャー・ト
ラストの件

二月の理事会で、三月末にニューデ
リーで開催予定のヒマラヤ環境保全を
テーマとした会議に山田会長の出席を
決めたが、次回の会議を日本で開催し
て欲しい旨の要望があった場合の回答
につき検討した。その結果一九九一年
の秋でよければ、引き受ける方向で回
答することにす。

- (6)岩菅山冬季オリンピック競技コース
に関する要望書の件
本件については、昨年十一月十七日
付要望書(『山』五三五号一七頁参照)
を提出したが、その後招致委員事務局
の説明を受けた結果、本会が岩菅案
に納得し、反対を撤回したような報道
が流れ、かつ会の内部の連絡も悪く、
誤解を招いていることもあるので、本
会の要望が変わっていないことを再確認
すると共に、抗議文を長野冬季オリン
ピック招致委員事務局の青木競技施
設部長宛出状することにし、その文面
につき内容の確認を行った。
- (7)篠田名誉会員に関する件
一月三十一日付、山田会長回答文に
対し、二月十九日付、再度再考を要望
する旨の質問状が届いている旨説明が
あったが、本件は、会長、副会長に一
任することにす。
- (8)山研改築案検討の件
石橋山研担当理事より、山研の老朽
化に伴い、この際改築しては如何かと

の説明があり、種々検討の結果、改築実施の方向ですすむことを確認したが、時期については資金の問題もあり、平成三年度以降をめどとする。
(9)指導者賠償責任保険の件
本件は入沢理事を担当窓口として、新年度から加入することにする。

〔委員会報告〕

●会報(小倉)

編集は順調に推移している。

●集会(入沢)

六月の若葉会山行は六月九〜十日、宮城支部の世話で、鳴子町の禿岳(小鎗山)の鬼首高原山荘に決定。

●山研(石橋)

本年度は四月二十八日開所の予定。

●図書(山本)

三月二十四日の山岳史懇談会は「一橋山岳会を語る」をテーマに行う。

●フィルム(代、松田)

古典的映画フィルムより五点のビデオ化を行う(エベレスト一九二四、ナンドコート征服、黒部の秋、冬のロータンパス他)

●総務(藤井)

三月十七日(土)新入会員オリエンテーションを実施する。

〔その他〕

(1)富山県山岳遭難対策防止事業についての説明(藤平)

(2)日ノスポーツ交流事業(山本)

(3)国土地理院主催の写真と地図で見る「日本の山岳」展協賛の件……承認
(4)国会図書館編集になる和雑誌目録作成協力の件
(5)本日の入会承認者 織田沢孝全他二十九名を承認する。

・ルーム日誌

(3月)

- 2日 山研委員会
- 6日 婦人懇談会
- 7日 青年部
- 8日 図書委員会
- 12日 総務委員会
- 14日 常務理事会
- 15日 理事会
- 17日 新入会員オリエンテーション
- 20日 山研委員会、資料委員会
- 23日 三水会、青年部
- 24日 山岳史懇談会「一橋山岳部」
- 26日 長野市オリンピックピック招致委員会との会談、フィルム委員会
- 27日 自然保護委員会
- 29日 学生部

………
会員異動 3月

3月来室者383名

物故

- 松村 周典(五一一九) 2・17
- 宇田 正治(七二〇二) 89・11・8
- 塩田 輔雄(一六二二) 3・28

南崎 大海(四八五〇) 2・14
退会
廣瀬 正弘(八二九三)
小池 隆志(八九七七)
福重 俊二(九四八七)
亀谷外毅雄(三九九〇)

タンポチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

二万円―白川義員。一万五千元―中島寛。一万円―伏見紀子、宇田川芳伸。五千円―上原泰行、禿真理子、森本市郎、大関保、國生勇男、梶正彦。二千円―三ツ石清。

四月三日現在累計一八一名、累計金額一、七五三、〇〇〇円



☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

●自然観察山行

自然保護委員会

テーマ 富士山の自然を訪ねる

講師 田村説三会員

コース 五合目より御庭、奥庭を経て三合目まで歩く。約三時間

期日 六月十七日(日)

費用 四千元(交通費)

集合場所 新宿西口スバルビル横
集合時間 午前七時三十分
携行品 雨具、弁当、防寒具
申込み 六月七日まで事務局内自然保護委員会までハガキで。
(雨天決行)

●英国山岳会移転

The Alpine Club は、長らく 74, South Audley Street にありましたが、この度 Alpine Club Library と共に左記へ移転した旨の連絡が届きましたので、お知らせします。
118 EATON SQUARE LONDON
SW 1W 9AF Tel: 01-259-5591

(Y・M)

●海谷山塊 駒ヶ岳

親睦登山会のご案内

越後支部

今回は富山県境に近い、海谷の駒ヶ岳(一四八七m)で開催致します。近年、漸く一般登山者が関心を抱きはじめた山域の一峰ですが、根知川に面した屹立四〇〇mの、屏風のような岩場登り(初心者でも安心)や、頂上一帯の樺の原生林が、参加各位を魅了することでしょう。また青海町の景勝地、天険親不知海岸に在って、穂高岳を仰ぎ見る「ウエストン像」も紹介します。

日程 六月十六日(土)～十七日(日)

十六日午後四時に北陸線糸魚川駅前集合。親不知の景観を探訪してから、糸魚川市美山公園内「パークイン美山」で、さわがに山岳会の小野健氏(支部会員)からフォッサマグナや青海湖変成岩の話などを聞き、山仲間懇親会を楽しんで頂きます。海の幸と越後の銘酒をご堪能ください。

十七日は駒ヶ岳登山。北アルプスや上信越山岳群の眺望が見事です。岳友お誘い合わせてのご来訪を歓迎します。

参加費 一万二千元(一泊二食)
申込み 六月五日までに〒951 新

図書受入報告

図書委員会

平成2年3月受入図書

1. 筑木力編「越後山岳 第8号」 日本山岳会 越後支部 平成1(越後支部寄贈)
2. 沢聰著「四季の山」 新ハイキング社 平成2(著者寄贈)
3. 花井馨編著「青雲の弥彦山」 弥彦村教育委員会 平成1(編著者寄贈)
4. 孫慶錫著「그산길그여로」 平和出版社 1990(著者寄贈)
5. B.H. Седельников "От Алатау до Эвереста" Онеp 1988 (カザフ登山協会寄贈)
6. A. Ranei Tarraga et al. "Medicina de Montaña" unio Excursionista de Catalunya 1989 (児玉茂氏寄贈)

潟市管所通一番町の学生書房方 日本山岳会越後支部へ、はがきまたは電話025122219870番で。

お申込み受付次第、詳細の計画書をお送り致します。

◎写真と地図で見る 日本の山岳展

日本の山岳展

六月一日～十日までNHK放送センター内の展示プラザギャラリーで国土地理院主催の展覧会が開かれます。昨年より恒例となった「測量の日」に合わせて行われるもので、「日本の山岳」が今年のテーマに選ばれたため、本会も協賛することとなりました。本会所蔵の武田久吉元会長の貴重な地図各種と収納箱を出品しますので、ぜひこの機会にご覧下さい。

◎「安曇野山岳美術館」より

今般、「安曇野山岳美術館」の七周年を迎え、その展示作品を陳列替え致しますのでお知らせ致します。

記

△オープン▽平成二年四月二二日(日)
△常設展示
△展示作品▽

- ・ 故足立源一郎氏作品・名作「永壁」を初め十六点
- ・ 山里寿男氏作品・新作を初め旧作

まで、主に「北アルプス」を中心にさらにチベットまでの作品など約三十点、桑原宏氏作品・二点

とくに故足立源一郎画伯の遺作十六点が一室に並び、さらに現役山岳画家の第一人者山里寿男画伯の作品が並ぶ壁面はご来場者のご期待に十分に添えられると確信致します。

△安曇野山岳美術館▽

〒三九九一八三長野県南安曇郡穂高町有明三六一三一二六
TEL〇二六三三八三四七四三(穂高温泉郷すぐそば・穂高駅よりタクシー七分)

安曇野山岳美術館館長 水上 巖

「あとがき」▼長野五輪招致委、滑降コース新設断念。裏岩菅山は健在。自然保護の勝利を喜ぶ。▼会報は会員みんなで作るもの。よくも悪くも会員次第。よき投稿を望む。(A・O)

平成二年五月二十日

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田 二郎
編集代表 小倉 厚

電話東京(03)四四三三
振替口座東京三一四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六
赤坂グレイスビル

印刷所 株式会社 技報堂